

◆リレー寄稿

きめ細かな対応、日本でも



(チェルノブイリ4号炉
石棺の前で)
福島県生協連
専務理事 佐藤 一夫氏

ご支援に心から感謝申し上げます。ベラルーシ・ウクライナ福島調査団※に参加しました。両国とも国が責任を持って除染し、詳細な汚染度マップが作成され、除染・土壌改良・適地適作の政策も明確です。また食習慣に合わせ食品摂取量に基づく細かな品目単位で基準値が設定されています。学校には放射線測定器があり、家庭の食べ物も測定しています。病院には身体用の測定器もあります。

こういう態勢や支援は日本でも必要です。保護者は子育ての不安に加え、健康や食事など悩みは尽きないのです。

「悲劇の中でも自分の人生を探ることが大事」「原発より命が大事」。25年たったチェルノブイリから頂いたメッセージです。

※ チェルノブイリ原発事故で原子力災害にあった地域の放射線対策や健康管理、復興策や生活を直接知るため、ウクライナ共和国とベラルーシ共和国を10月31日から11月7日までの日程で訪れました。

コープネットグループ、宮城・福島で、憩いの場作り

コープネットグループ※では「被災地を持続的に支援したい」との思いから各地で継続的にほっとできる場の提供を行なっています。

※コープネット事業連合および同事業連合の8会員生協・関連子会社。

コープネット事業連合「ふれあい喫茶」

コープネット事業連合は、11月21日に宮城県東松島市の仮設住宅で「ふれあい喫茶」を開催しました。みやぎ生協と協力して行なわれ、4回目となる今回は、コープネット、ちばコープ、コープとうきょう、コープながのの職員6人が参加しました。

会場には仮設住宅の人々が続々と訪れ、茶話会のほか松島医療生協の血圧測定、みやぎ生協の「組合員のつどい」も開催。計75人が楽しみました。前日被災地を視察していた、ちばコープ・高津介護センターの君塚法子さんは「津波の被害の大きかった大曲浜を見て人間の無力さを感じましたが、仮設住宅で強く生きる皆さんの姿に人間の強さを再び感じました」と話していました。今後も月2回のペースで開催予定です。



コープネット職員が、じっくり話を聴く。



同じ場所で、みやぎ生協の「組合員のつどい」も行なわれた。



折り紙が会話のきっかけになり、話がはずむ。



ボールで、思いっきり遊ぶ子ども。

さいたまコープ「ふれあいひろば」

さいたまコープとコープふくしまは、11月26日、福島県南相馬市の仮設住宅で「ふれあいひろば」を共催しました。さいたまコープの職員ボランティアが4月以降、南相馬市で継続して活動してきた中で、現地のボランティアセンターから「すべての世代が参加できる場、親子で参加できる場」づくりへの協力を打診され、コープふくしまの組合員や職員と協力して10月から開催。今回で3回目を迎えました。

今回は、折り紙をしながらのおしゃべりや、外遊びも含めた「あそびのひろば」に、仮設住宅の大人18人、子ども8人が参加しました。同日、南相馬市で泥出しなどに協力していた職員ボランティアも途中加わり、交流の輪が広がりました。